愛と憎しみ

◉

浦上京子

「パパ待って！　待って、まーあっーてー！」声がだんだん小さくあぶくの中に消えた。

振り向くと長男、茂が小さな手を広げて、遠ざかって行く僕を掴もうと必死で追いかけて来ている。三回目の呼び声がブクブクと泡の底へ沈み、小さくなって聞こえなくなったと思ったら、眼が覚めた。

頚から後頭部にかけて、ねっとりとした汗をかいている。ベッドの上に上半身をおこし、汗を拭く。どうしてこんな夢を見たのだろう？

茂は幸せそうな顔をして眠っている。僕は夢の中で茂から逃げようとしていたのだ。それを茂は一生懸命追いかけてきて、掴もうとしていたのであろう。

十畳の寝室には僕と、妻、美奈のベッドが両サイドにあり、その間に子供の小さいベッドが二つ、茂、四歳と、長女弥生、二歳のベッドを並べている。

夜が明けるまでには未だ時間がある。ここ生駒山の二月は冷え込みがきつい。寝付けなかった昨夜、やっと、うとうとしたと思ったら、僕は走って逃げている夢にうなされて、眼が覚めた。

昨日僕は初めて、茂の血液型がA型であるのを知った。茂が生まれてから昨日まで何も疑う事無く可愛がり育ててきたが、幼稚園への入園書類を記入していたら、本人の血液型を記入する欄があり、母子手帳で確認した。A型と書かれている。僕は「はあっ、まさか」と疑った。

「美奈、茂の血液型はA型と書いてあるぞ！　おかしいのと違うか？　僕はB型、美奈はO型だろう、間違っていないか？」思わず声は大きくなっていた。

夕食後の片付けをしていた美奈は、水道の水を出しっぱなしにして、皿を洗いながら、

「おかしいわよね」と答えた。

僕は美奈の平気な態度に腹がたち、声を荒げた。

「水道の音がうるさくて聞こえない。水道を閉めてこちらに来ないか」

美奈はエプロンで両手を拭きながら、テーブルに寄ってきた。僕の前に坐った美奈に向かって、

「この母子手帳に記入されている血液型はおかしいのと違うか？　両親の血液型から言って茂はO型か、B型のはずだぞ」と、妻の顔を覗いた。
「そうよね、私も産後母子手帳を見ておかしいとは思ったけど」
「おかしいですむ問題ではない。どうして今まで黙っていたんだ」僕は妻を疑った。思わず口を尖らせていた。
「忙しくてつい、忘れてしまって」美奈は澄ました顔をしている。僕は腹が立った。
小豆の種を蒔いた畑に、大豆の芽が出たのと同じだ。言語道断だ。
「じゃあ、弥生の母子手帳をここに持って来い」僕は驚きのあまり、妻を睨みつけた。
美奈は「はい」と腰を上げ、箪笥の小引き出しから、ピンク色の母子手帳を持って来て僕の前に出した。僕は慌ててその欄を開いた。そこにはB型と書かれていた。納得した僕は「これはしまっておけ」と美奈の前に、ポンと音を立てて置いた。
このままにして置けなくて、次の日、出勤前に茂が生れた産婦人科病院を訪ねた。単に病院側の記入ミスかも知れないと、カルテを見せてもらう為である。
眼の前に出されたカルテには、はっきりA型と書かれ、おまけに検査結果用紙まで貼り付けられていた。
自分は阪南大学病院の薬剤師である。こんなことは薬剤師でなくても、誰でも知っていることだ。産院から、大学病院に向かった。歩いている僕の足は重く、ふらついていた。他人には行く方向さへ定まらない酔いどれの男に見えたであろう。
僕はこの日一日中考えていた。
茂は産院で乳児取り違え事件に会ったのかなあ。それにしても、今まで全く気のつかなかった自分はどうかしていたなあ。自分の子だと信じきっていた。
妻はいくら忙しいといっても、僕に相談もしないというのもおかしい。何か疑いたくなる。しかし結婚する前、二人は四ヶ月同棲していたのだから、茂が生れる十二ヶ月前から一緒に暮していたことになる。妻を疑うのも的はずれのような気がする。
この日も、窓口には朝から沢山の処方箋が廻ってくるが、一向に薬の名前も量も頭に残らず、頭上をスーと通過して行く。今日は仕事にならない。もし投薬ミスをしたら、病院の命取りにもなりかねない。今日は仕事を途中で止めよう。そう思った僕は、一般の人が出入りできない緊急救急室にはいり、横になった。
枕をして天井を見ていると、なぜ長男がA型なのか、色々なケースが詮索されて

きたが、それを一つずつ、打ち消してゆく、どうしても科学的には成立しない。疑心暗鬼に陥ってきた。仕事にならないので早退することにした。どうしてこんな事が起こったのであろうか、妻を疑ってはいけないけど、疑ってしまう。

この夜、僕は茂と弥生を連れて、二駅離れたところにある心療内科を訪れた。近所でなく少し離れたところ。近所の人と顔を合わさない方が良いと思ったからである。

僕は子供たちを待合室に残して、一人で診察室に入った。六十歳ぐらいに見える男性ドクターは笑顔で迎え入れてくれた。多分自分の心配そうな顔色を見て、悩みを持ち込んだなと想像したのであろう。僕は一礼して、医師の前の丸い椅子に腰掛けた。

「どうされましたか?」優しい声で尋ねてくれた。

ドクターは僕の訴えを待っているようにみえる。

「すみません、先生、子供達のＤＮＡ検査をして頂きたいのですが」医師は少し間をおいて、返事をした。

「いいですけど、何のためにですか」

一般的には何か思うところがないと、依頼しないものである。医師は半分僕の悩みを受け止める様な顔をしていた。

「単に親子確認のためです」と率直に答えた。

この時、親子である証明を求められた。他人では困るのであろう。僕は手に持っていた健康保険証を提示した。

「分りました。奥様には内緒でお調べになりたいのですね」と優しく僕の顔を覗いた。

「その通りです。よろしくお願い致します」

ではお子たちに悟られないように、診察中に何気なく粘膜を採取して、気付かれなように調べましょう」医師は僕に好意的であった。

先ず僕の口内に綿棒を入れて粘膜を擦りとった。二人の子供は何も疑う事無く診察を終えた。ただの風邪だから、薬は呑む必要が無いので、お出ししません。と、看護師さんは子供たちに話してくれた。この日は皆何もわだかまりなく帰宅した。

指定された日、検査結果を受け取りに行った。

「弥生さんは間違いなく、本田武雄さんのお子さんですが、茂さんの方は、あなたとの親子関係は成立しませんでした」と、気の毒そうな顔をして医師は封筒に入った証明書を渡してくれた。

瞬間頭を金槌で打たれたような衝撃を受けた。

僕はそうであろうと予想はしていたが、まさか、本当に違うと言われたくなかった。重い頭をゆっくり持ち上げ、

「先生、この検査は確率何パーセントぐらいですか?」確率の低いことを願っていた。

「検査は正確になってきましてね、九十九・九パーセント確実といわれています」

僕はこの診察室で、医師の前で狼狽するわけにはいかない。全身の力を振り絞り立ち上がった。何事も無かった如く一礼して診察室を出ようとした時、医師は僕に追い討ちをかけるように背後から付け加えた。

「ＤＮＡが同じ人は約四兆七千億人に一人といわれていますので、間違いないでしょう」

僕は完全に打ちのめされた。

多分こうなるであろうと、覚悟はしていたが、この時の落胆振りが他人に分らない筈はない。このままどこかへ消えてしまいたくなった。これ以上妻を咎めても事態は改善されず、悪化するのみであろうと悩んだ。

携帯で妻に連絡をとった。

「今日は友人の家で呑む事になったので遅くなる。ひょっとしたら、明日日曜日だから泊まって帰るかも知れない。心配しないで先に寝ていて欲しい」これだけの嘘がやっと口から出た。

僕はこれだけ告げると、何処かに転び込みたい心境になった。足がもつれて歩き難い。信じていた者からの裏切り！　嫉妬か、挫折感か分らない不甲斐無さで、全身が混濁してきた。自分の家庭は崩壊してしまうのであろうか？　子供たちはどうなるのであろうか？　僕の両親がこの事実を知ったら、僕のことを頓馬な馬鹿だと罵るだろう。両親は二人の結婚を、あれほど執拗に反対したのにと嘆くであろう。

この時僕の頭の中には嵐がうずまき、立っておれない状態になった。足が宙に浮いた。知らず知らずの内に、美奈と交際し始めた頃、二人で週一ぐらい通っていた駅の裏通りにある「カフェ・バーひばり」の暖簾を潜っていた。自分はなんて馬鹿

なんだろう、酔ってしまいたかった。前後不覚に陥るまで呑み、この世から姿を消したかった。

ビールから始めて、冷酒、ウイスキーと変えてみたが，酔が廻らない。呑みながら自分は一体何をし、何をしようとしているのか、自分が分らなくなった。トイレに入って右手指三本を喉ちんこの奥まで突っ込んで、胃の中の汚物を必死で吐き出した。暫らくすると、憑き物でも落ちたように体が軽くなってきた。やっと我に返ったような気持になり、タクシーを呼んで帰宅した。

タクシーの音で美奈は玄関迄迎えに出て来た。

「お帰りなさい。早かったのね」うつむき加減でか細い声を出した。

僕は美奈と目を合わす気にはなれなかった。

翌日の夜、子供たちが眠ってから、夫婦はダイニング・テーブルで向き合った。僕は慎重に、且つ冷静に妻の顔を見ることができた。何故なら、何を失ってもかまわないという覚悟ができていたからである。おもむろに口を開いた。

「美奈、僕はこの前二人の子供を連れてＤＮＡ検査を受けてきた。黙って検査をした事は謝る。しかし僕の疑っている事が誤りでありますようにと、念じながら受けた」

ここまで話した時、腰がよろけそうで、足は宙に浮いた。僕はテーブルの縁を両手で確り握っていた。

この時妻は取り乱す事もなく、こちらに向いて、

「血液型が納得できなかったから?」といつも通りの笑顔を向け、両手で湯のみ茶碗を口に近付けている。この時妻を見て、この女は、鈍いのだろうか、馬鹿なのだろうかと、腹の中は煮え滾っていた。

「そうだ、手品でもないのに、不思議だから真実が知りたくってね。その結果茂は九十九・九パーセント僕の子ではないと診断された」

ここまで話した僕はこれが精一杯で、目を伏せたまま、妻の返事を待った。しかし、妻は両手をついて謝るでもなく、泣き出すでもなく、半ば犯人のように口を閉め、目を伏せたまま只沈黙を守っている。僕は大きな声で「白状しろ」と怒鳴りたかった。しかしここで怒鳴っては何もかも壊れてしまう。我慢して待ったが返事がない。彼女は身をちぢめ沈黙を続けている。僕は妻に向いて、腹にも無い言葉を並べた。

「若い時は弾みも手伝って、取り返しのつかない過ちを犯す事もある。僕もかつて大学二回生の時、女性と一晩過ごしたことがある。相手を熟知しないで、酔った後雰囲気に負けて変った行動に出ることもある。若さというものかも知れない。美奈も誰かに誘惑されて、一夜を過ごしたことがあるのではないか？　今更咎めようとは思わないが、事実を知りたい」

ここまで話した僕は当時の事を思い出していた。美奈が妊娠したと思う頃、アルバイトの当直にも良く出かけていたし、自分の両親が二人の結婚を反対し、同棲していた美奈と別れて家に帰るようにしつこく電話が掛かっていたことを。

美奈が口を開くまでには三十分近くかかった。妻は薄っすら涙を浮かべ、口元が少しふるえている。

「もう五年も前のことだからすっかり忘れていたけれど、大学のゼミで一緒だった吉岡さんと一晩一緒に過ごした事があったけど」と小さな振え声を漏らした。

この時の妻の心境は、忘れていたのではなく、吉岡との過去を全く忘れ去り、名前さえ聞きたくなかったに相違ない。

相手が知らない者であれば幾らか救われるけれど、僕は不幸にも、吉岡光男という堅物男を知っていた。

「あの無愛想な堅物男の吉岡とか？」

妻は湯飲み茶碗を両掌で抱きこんだまま、小さく、こくりと頷いた。吉岡とは同じ大学であったが学部も違い馬が合いそうにないので親しく話したことはない。

「何故吉岡とそんな関係になったのか」と問い質した。妻は下に向いたまま、

「御免なさい。私たちの結婚を貴方の両親にあまり反対されるので、どうしょうと迷いにまよったあげく、単刀直入に答えてくれる吉岡さんに相談に行って、そのまま一晩泊まってしまったの」

僕はこの時、阿鼻地獄に、蹴落とされたように凄惨な心境に陥った。何ということだ、自分を慕って僕の元へ嫁いで来てくれたとばかり信じていた妻が、吉岡と情事を交わしていたとは！　あの頃僕は反対する両親を苦しい思いをして、説得していた最中ではないか？　美奈と吉岡からみると、自分は馬鹿なピエロに見えたのではあるまいか。

美奈と吉岡は、つまり厚顔無恥な二人はその夜妊娠するにいたったとは！　妻は吉岡の胸の内で恍惚感に充たされていたのだ。

悪いのは美奈の方だ！　吉岡も吉岡だ、悩んで相談に行った女性を泊めるというのも、どうかしている。僕はうなだれた。

つまり茂は吉岡と美奈の子である。僕は茂を自分の子だと信じて育ててきた。それが今になって吉岡の子だといわれても、どうしたら良いのか分らない。一体僕はどうしたら良いのか、悶々とした思いで床に入ったが眠れる筈はない。勿論夫婦の間に会話が生じる筈もない。今、山頂から、雪の塊が一気になだれ落ちて来るような不穏な響きが、地の向こうから伝わってくる。これが夫婦の危機であろうか、迂闊に他人に相談もできず、過去にも返れない。金銭で解決できるものでもない。行動を起せばよけいに苦しくなり、家庭はこわれてしまうであろう。

今後どうしたら良いか、離婚して茂を吉岡に押し付けて、弥生だけをひきとるか、今まで通りに暮らすか、もしそうした場合、以前と同じように茂に愛情を注ぐ事ができるであろうか？　しかし茂は何も悪くない。何も知らずに我家に生まれてきたのだから。

けれど、体内には吉岡の血が流れているのだ。想いがどうどう巡りをしているうちに自己嫌悪に陥った。美奈も反省しているに相違ない。何をどう考えているのだろう。離婚すれば僕は吉岡の子供をみなくてよいが娘の弥生はどうなるのであろう？　悩みはつきず専門家に相談する事にした。

次の日、僕は大阪の北浜に有名は弁護士がいるという、弁護士事務所へ相談に行った。行く途中も考えていた。

茂を吉岡に引き取ってもらう事はできないだろうか？　この場合、兄妹離れ離れになっても仕方がないと思っていた。

弁護士の答えは予想外の返事である。

「茂が出生後、一年以内でないと親子関係の解消は出来ない。日本の民法では、親子でない事実が解明されても、戸籍から茂を除籍する事は出来ない。奥さんと離婚されても、茂さんはあなたの長男として認知されている以上、彼が青年に達するまで、養育費を支払う義務が生じます」思いもよらない回答であった。

茂が憎いわけではない、ついこのあいだまで、我が子として可愛がり育ててきたのだ、優しく、素直に育ってくれている茂は良い子だ。家族が崩壊するか否かは僕の決断にかかっている。悪い夢に晒されているのではないか？　こんな現実があっ

てたまるか！　僕は人生の岐路に立ち、心身は完全に困憊していた。
野山の木々は薄緑に変わり、春が訪れているのに、僕の心は南極の氷河より尚固く、何をも受け入れる余裕はなかった。そのまま、空白の日々が過ぎた。
三週間はすぎた。少し達観できるようになった。しかし、吉岡と美奈を許した訳ではない。僕は私立探偵を依頼した。

吉岡は現在何処に住み、勤務先は、職種は、家族関係は、血液型は、美奈との関係が今も続いているかなどである。
報告書が手元に届くまで、非常に長く感じた。
報告書が届いたのは依頼してから二週間目であった。僕は総てを予期しながら、恐る恐る開封した。報告書に依ると、
吉岡光男は、現在、阪都大学で物理学の准教授である。
四年前結婚して、長男が誕生、三才である。
妻、良子は五歳年下で現在三十二歳である。尚同大学の生理学教授の長女である。
血液型は全員Ａ型　吉岡光男―ＡＯ
長男一郎―ＡＡ
妻　良子―ＡＯ　それぞれＡ型である。
住所は神戸市東灘区御影山手三丁目Ｘ番地Ｘ号である。との報告であった。
この報告を受けて、茂の父親が吉岡であることを確信した。一度は我妻の出産した子だ、自分の子として育てようと、決心していたが、心は大きく乱れた。

仮に僕が吉岡の妻、良子さんに近づき、良子さんとの間に子供が生まれたとして、その子供を何も知らない吉岡光男に育てさせたら、どうだろう？　そう考えただけで、心の中に掛かっていた霧が、スーと晴れてきたような気分になった。策略を練ってみたくなった。
不可能な事ではない。もし、仮に成功したとして、僕と良子さんの間に生まれる子の血液型は、僕がＢＯのＢ型であるから、ＡＯか、ＯＯか、ＢＯかＡＢの四種類である。ＡＢかＢＯであれば一目瞭然と僕の子であると判るが、ＯＯか、ＡＯであればＤＮＡ検査をしないかぎり、吉岡の子として疑われないのではないかと、色々思案していた。

今自分は吉岡に対して、仇討ちをしようとしているのか、良子さんとの間に生まれるかもしれない我が子が、吉岡光男のようなもの言わずで、無愛想な、自己中心的な人間に育てられては、返って可哀相だと迷っているのか、分らなくなった。

美奈が相談に行った時、吉岡は悪意なく、泣いている美奈を可哀相に想い抱いたのかも知れない。いや！　それはない。理性が働く筈だ。

美奈がだらしなかったのか？　血液型がＡで疑問を抱いた時、吉岡に告げたのだろうか、告げているとしたら、扶養の義務だけ与えられて、僕は蚊帳の外に置かれている。

若し良子さんと僕との間に不倫の子供が生れたら、今の我家と同じ状態になる。神様がこの関係を許してくれるなら、そうなりたかった。もしそうなったとしても、茂は吉岡の手に渡したくない。エゴかなあ、万が一にも良子さんとの間に子供が生れたとしたら、何も知らずに育てる吉岡に謝りに行くだろうか、それをしたら復讐の意味がなくなる。本当の復讐とは良子さんとの間に誕生した子供がＡＯかＯＯの子が生まれ、ＤＮＡ検査までしない吉岡、疑わない吉岡が最後まで実子として嬉しそうに育てているのをみて、復讐に成功と言えるのかも知れない。しかしそんなに思い通りにはならないであろう。万一そうなったら、ひどい神のしっぺ返しがあり、僕は今よりもっと苦しむようになるだろうか？

僕は日本の戸籍法が気に入らない。大阪でごく有名な弁護士さんを紹介していただいた。

「確かに、明らかに自分の子でないことが確証できたら、生後一年以上過ぎていても、それなりの複雑な手続きをふめば、自分の戸籍から出す事は可能です。その場合、その子供の行き先の戸籍を確保してからでないと除籍は無理ですよ」と教えられた。

今、戸籍法も変わりつつあるようである。

「どうしても貴方の戸籍から、茂さんを抹消したければ出来ないことはないけれど、将来において、茂さんと、弥生さんの受けるダメージは大きい物である事を知って欲しい」と、注意を喚起された。

血液型に気がついてから、半年過ぎた。表面上は変わり無く暮らして居るが、家庭の中は常にギクシャクして優しさも、丸みも無い。何時でも分解しそうな空気で

ある。美奈はいつもと変らないような素振りをしているが、口数が減ってきた。僕に対して申し訳ないと思っているのか、遠慮しているように見える。

茂が幼稚園に行きだしてから何となく忙しそうにしている。弁当も二学期から作っているようだ。茂も僕があまり話さないせいか控えめである。詳しい事は知らなくても、僕があまり快く生活していないことは幼くても、以心伝心で判っているようだ。

二学期になって、十月に運動会があるので見に来て欲しいと言った。どうして僕が、どんな顔をして、他人の子のために行かなくてはならないのだ。『悪いけどお前のパパではないんだ』何の罰に行かなくてはならないのだと、頭にきた。

「パパは最近しんどくって、気がすすまないから、ママに行って貰いなさい」と断わった。

自分は人間が小さいのではないか、もっと大きな心をもたないと、と思ったり、この子の母親が自分を騙していたと思えば許し難くなったり、悪戦苦闘の毎日である。

暑い夏も過ぎて初秋の涼しい風が頬を撫でて通るようになった。僕は勤務先からの帰り道、何となく家に帰りたくなくなって、駅に近い「カフェ・バーピノキオ」に入った。呑める人は楽しいんだろうなあと思って入った。何の変哲も無い店の構えであるが、奥の方に女性客が集まっている。楽しそうな笑い声が聞こえて来る。

女たちは亭主の陰で何を話し、楽しんでいるのかと、その近くの椅子に腰掛けた。僕は女性グループの方に背を向けて坐ったが、話の内容は充分聞き取ることができる。

彼女たちは大学の同窓会の帰り、二次会と称して、グループで寄っていたようだ。彼女たちの話は御多分に洩れず、始めの内は亭主や舅、姑の悪口であり、次は子供の自慢話、それが終わったと思うと、この席にいない学友の陰口である。何人目かの話の種に、偶然吉岡良子の噂話がでてきた。……！

「彼女のご主人は早い出世で、良子が結婚する時は奈良大和大学の物理学の講師だったのが、今は阪都大学の准教授で、今度教授候補にあがっているらしいよ」誰彼となく八人の女性は、話を盛り上げているが、かなしいかな、声だけで話している人の顔も表情も分からない。

「同窓会なんか馬鹿らしくて行けないと、欠席したのかなあ?」と、誰かがいったら、

「違うちがう、良子は来たかったのだけど、あのだんまりの旦那が一言、『子供はどうする』と言ったそうよ。だからこの度は欠席とか、可哀想よ」するともう一人の友人らしき声で、
「良子のご主人偉いのかもしれないけど、絵に描いたような堅物で二度と会いたくないような人なの、まああんな亭主とよく我慢して暮らしていると思うわ」次の女性は、
「そのうち別れるのと違う、面白くもない男と何故暮らさないといけないのよねぇ」
「それは言い過ぎよ」会話はリレーとなっている。
「夫婦の間って、他人には分らない良いことがあるのかも知れないよ」
と誰かが話すと一斉に皆で声を高くして笑った。呑めない僕はコカコーラとサンドイッチを食べて彼女達に気付かれない内にと思って引き揚げた。帰りながら、彼女たちの言っていた事を反芻した。
堅物男だ、二度と会いたくない、その内離婚するだろう、良く我慢している、笑い顔を見たことが無いなど、吉岡光男はよほど面白くない男のようだ。

それから数ヶ月後、病院の調剤室の窓口に幼い坊やを連れて、薬を受け取りに来た女性がいた。カードに眼を通すと、吉岡光男の長男、吉岡一郎とネームが入っている。
一郎君は青白い顔をして、眼が大きく一見腺病質にみえ、傍にいる母親に良く似ている。
「一郎さんのお母さんですか」と尋ねると、彼女は少し強張る顔をし、大きな目を僕の方に向け、
「ええ、そうです」と答えた。
僕はこの時彼女の顔をはっきり覚えた。右の目尻と、小鼻の横に小さな黒い黒子が一つずつあった。僕の寝ていた虫が起き上がったのである。僕は近づきの一歩手前だと思い、
わざと親切に、優しい微笑みを浮かべ、親しみをこめて話した。
「なんと、色白で、可愛い賢そうな坊ちゃんですね」と、おべんちゃらを言った。この時彼女は疑いもせず、嬉しそうに笑った。僕は続いてその幼い子に向かって、「パパは」と尋ねた。一郎君は、横の方へ向いて「あっち」と指差した。私は彼女に向

かって、
「この薬が服用し難いか、何か特別な異常が表れましたら、残薬を持って直ぐおいで下さい。おだいじに」と渡した。この時彼女は少女のような可愛い目をして、
「特別な異常とはどう言うことでしょう」と尋ねた。
「例えば、蕁麻疹など出てきたら……」と説明した。彼女は何回も腰から体を曲げ礼を言って帰った。
僕は本気で彼女に近づき、体を重ねることができるであろうか、もしそうなったら、今までの怒りは治るかも知れないが、又別にそれ以上の悩みが生まれるのではないか、とあらぬ空想をめぐらし、薬局の窓から澄み切った高い青空を眺めていた。
それから三日目、吉岡良子は息子の薬を再度受け取りにきた。
「先日のお薬で殆んどよくなりましたの、でも先ほど主治医に容態を申し上げて、相談致しましたところ、念のためにもう一度お薬を服用するように、と仰って頂きましたのよ」
首を少し右にか傾けて笑顔で話しかけた。
「奥様、今日は一人で見えましたか」と笑顔をかえした。
彼女は人懐こい眼元で、両唇の端を少し上げ、笑顔を向けて、
「子供を病院に連れていくと、ばい菌に取り付かれるといけないので、おいて行けと夫が申しますものですから」彼女は恥ずかしそうに、うつむき加減に話した。僕はこの時、直ぐ彼女を喫茶店にでも誘い出したかったが、どうしたら良いか、言葉も思いつかなかった。
只一つ、旦那が堅物で面白みの無い人であらば、その反対に構えて接すれば、案外早く落城できそうだと、一人微笑んだ。二人で会う機会は案外早く訪れた。

妻の作った食事を食べたくなかった僕は、初冬の日曜日、一人でふらりと知らない街に行ってみたくなった。奈良から神戸三宮に通ずる電車に乗って、阪神魚崎駅で下車して、六甲アイランドにある、小磯良平記念美術館に足を向けた。美術館も、絵画もしっとり落ち着き心は和んだ。少し下って、水と樹木の間に敷き詰められた石畳の上を、海に向かって歩きながら、アイランドの街で、ランチの美味しそうな店を探してみた。
新しくオープンしたレストランが眼につき、入った。奥へながく、途中は薄暗く、

背丈より大きい植物の鉢を配置し、所々に変った動物の模造品が雰囲気良くセットされ、中央の薄暗い天井の更に上のほうには宇宙の星座が輝いている。これは茂を連れてきてやれば喜ぶだろうなあー、と思いながらその奥へと進んだ。

一番奥は屋根がなく、パッと明るく、床には赤レンガが敷き詰められ、白く塗られた金属性のテーブルと椅子が五組セットされていた。その周辺には枝が垂れ下がった椰子を植えた鉢と赤く咲いた薔薇のつるを窓辺に這わしている。これは別天地だ、ぐずぐず苦しまないことにしょうと、青空の下、椰子の植木鉢の前に腰掛けた。異国情緒の漂う店だ。久し振りに気分が良く、楽しくなり、ようし家族を連れてきてやろうと、心が穏やかになった。

オードブルもスープも美味しい、僕は先ほどまで悩んでいた事を忘れかけていた。隣の席には父と娘らしい二人が坐った。

僕は弥生が大きくなったら、あのように父と娘とレストランに来るのもよいなあと、思わず微笑んだ。矢張り離婚はしないでおこうと、思い直した。コーヒーを飲もうとしたとき前の席に一人の女性が坐った。ふと見ると、先日見た黒子の女性である。

もう観念しようとした心は動揺した。今まで時間をかけ、諦める心と、穏やかに取り戻してた気持ちは、一度に裏返ってしまった。僕は思わず声をかけた。

「ああ、吉岡さん、こんな所でお会いできるとは、お子様はお元気ですか」吉岡夫人も少し驚いたらしく、彼女は起立して挨拶をした。

「あーら、先生、先だっては大変お世話になりました」深ぶかと頭を下げた。

僕は飲みさしのコーヒーカップを置き、にこやかに返礼をした。

「今日お子様は？」僕は一人でいる夫人を不思議そうに見尋ねた。吉岡夫人は笑顔で、

「一郎は夫と一緒に幼稚園に行ってますの」

「それは、それは年少さんですね」と話をつづけた。彼女は何の屈託もなく、

「今日は父親との給食参観日ですの。親子二人で手を繋いで出かけましたのよ」と首を傾げた。

僕はしめたと思った。噂の堅物男の妻なら、日頃余り聞きなれない、美辞麗句を並べれば、心を奪うことができるかも知れないと思いついた。

夫人が食事の終わるのを待って、近くの喫茶店にお茶を誘った。夫人は何の疑い

も抱かず、素直について来た。
　初めて二人だけのデートである。時間は短く、次回を楽しみに待つような余韻をのこし、さりげなく別れた。三十分の間に吉岡の家族三人を褒め称えた。すっかり気を良くした夫人は、
「先生のようにお優しいご主人と一緒に暮せる奥様が羨ましいわ、私の家では夫は寡黙で、苦虫を噛んだような、ぶすーとした顔をしてましてね、笑い声を煩がりますのでね、全く楽しくありませんのよ。私の父も口数の少ない方でしたから、少しは慣れていますが、それとは別で、変人ですの。家のなかは年中曇ってまして、時々何処かへ出て行きたくなりますのよ」彼女は左右を見てから「あら、先生にこんなお話をして御免なさい」と僕の顔を覗いた。ぼくは思った通り、家庭内は楽しくないのだな、と悟った。
「吉岡先生は難しい研究をなさっていまして、私どものような気楽な仕事と違いますから、
奥様も大変ですね」僕は同情の声をかけた。
「わかってくださいます？　我家の中でドラムでも叩いて、大きな声をあげて歌でも歌いたい心境ですのよ」大人しい控え目に見えた夫人は必死で僕に訴えた。
「解かります。でも立派なご主人で、奥様はお幸せですね」ここまで話すと、彼女は僕の方へにじり寄って来て、口を尖らせて話し出した。
「今、教授候補にあがっているらしく、余計緊張しているのか、食事、風呂、新聞、お茶、寝るとしか申しませんのよ。わたしはまるでお手伝いさん以下の扱いをされていますの」
　暫らく二人の間には沈黙が続いた。僕は左横に坐っていた彼女の左肩に左手を沿え、自分の方へ近づけた。この時思いがけず、彼女は僕の左胸に顔を伏せてきた。五分間ぐらいであっただろうか、僕はそのまま彼女の上半身を抱き寄せていた。
　彼女はハンカチで涙を拭きながら僕から離れた。彼女は夫婦間の間で余程寂しい思いをしているのだろうと推測した。別れ際に僕は、
「又いつかお会いできたらいいですね、ゆっくりお話しを聞かせて頂きますよ」笑顔で彼女を見送った。すると、夫人は、
「これから幼稚園に二人を迎えにいきます」と喫茶店を出て行った。後に残って静かに考えた。

妻も吉岡の所に相談にいった時は、苦しんでいたのであろう。吉岡も、全くの悪意はなかったのかも知れない。今彼の奥さんも寂しい思いをして家庭を護っている。どこにも悪人は居ないように思えてきた。自分が眼をつむることによって、両家族とも平和に送れるのだと、思われてきた。

僕は以前良子さんに何かあった時のために、病院のメールアドレスを教えていた。喫茶店で別れてから、一ヶ月過ぎた頃、メールが入った。

「今日からMは一週間の予定でアメリカの学会へ出席のため留守ですY」大胆にも病院のパソコンに送信してきた。子供の容態が良くなったとか、悪いとかもう少し暗号的な文面は考えられなかったのかと思ったが、名前がイニシャルにしてあっただけは、まあ救われた。

次週土曜日の午後、一郎君は良子さんの実家に預けて、二人は奈良公園の近くにある和風の静かな旅館に宿泊の予約をいれた。差し向かいでビールと食事をとり、恋人同志のような楽しい時間を過ごした。

その内良子さんは、夫がいかに堅物で、妻を奴隷扱いにし、家庭の中は潤いがない。何時でも逃げ出したい気分だと話し出した。女は男性によって幸、不幸が決まるのよねとも話した。喋っている内にアルコールが廻ったのか良子さんは泣き出した。

僕は可哀想になり、思わず洋服の上から抱きしめた。

色白でもち肌の柔らかい女性の体、しかも僕に縋りついてくる可愛い仕種、優しく甘い香りが漂う。ひらひらと透ける薄い絹の衣裳をまとっている彼女は、羽衣を着けた天女のようで、何とも例えようがない。抱き合った二人は、天空にでも舞い昇ったような、恍惚感に充たされ、まるでユートピアに舞いついたような錯覚をおこした。

二人の情熱は燃え上がり、わが身を忘れ我が心を失いつつどれだけのあいだ抱き合っていたであろうか、二人は汗びっしょりで眼が覚めた。この時自分の長男茂は僕の子ではなく、貴女の夫、吉岡光男の子であると告げたかった。しかし、それに関しては彼女は関係ない人物である。どうしょうと悩んだが、彼女を愛してしまった今、愛する人のために、自分の胸に仕舞い込んでしまった。同時に僕はこの時、大いなる悪事をなしとげた事を深く反省した。

二度とこの人と会ってはいけない。彼女のあまりの魅力に侵され、もう一回逢っ

たらどうなるか？　絶対密会してはいけないと固く心に誓った。敵討ちもこの一回で充分だ。これ以上深追いすると、その果てには物の怪が待っているような気がした。彼女は異常な魅力を持ち、取り付かれるような気がしてきた。正気にかえった僕は、慌てて、彼女を一人残して宿を引き揚げた。

夜中二時前であったが、タクシーの音で眼が覚めたのか、迎えに出た妻は僕の顔を見てホッとしたのか、微笑みを浮かべた。僕は、

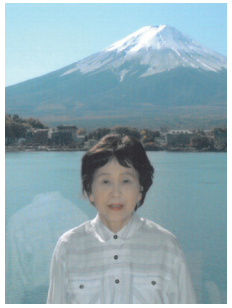
「遅くなって御免」一言謝った。妻は怪訝そうな顔をして、

「無事で良かったわ」と溜息をもらした。

もし吉岡夫人が妊娠する事があれば、それは神の仕業だと思った。もし妊娠していなければ、それは神のお助けだと思った。今夜は何かに取り付かれていたのだと、シャワールームに入って身を清めた。

一日、二日と過ぎて行くと、先日の抱擁は天国にでも昇ったような錯覚を覚え、あの日の夢のようなひと時が思いだされ、日増しに吉岡夫人に逢いたくなった。もう一度だけ逢いたい。いや、逢ってはいけない。苦しんだ。この時僕は、吉岡光男に対する敵討ちではなく、完全に彼女を愛してしまったことに気がついた。敵は討っても許されるが、道ならぬ人妻を愛してしまったことに深く反省させられた。

その後彼女からのメールは無く、妊娠したのかどうか判らない。罪の意識に苦しみながら、茂を自分の長男として育てることに決心した。そうすることに依って、吉岡光男に対する罪滅ぼしができると思った。



浦上京子（うらかみ　きょうこ）

一九三三年岡山県に生まれる。現住所　大阪府寝屋川市。美作短期大学卒業。小学校教師四年、医療事務従事四十五年間。現在は主婦、七十五歳より小説を書きたくなり小説を書くことが楽しくて、手探りで書いています。新人賞、奨励賞をコスモス文学会より受賞。佳作、文芸思潮より受賞。